東方幻永伝～End of the fragile dream～

練炭

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
東方幻永伝～Ｅｎｄ　ｏｆ　ｔｈｅ　ｆｒａｇｉｌｅ　ｄｒｅａｍ～

【Ｎコード】
Ｎ１２１７ＢＡ

【作者名】
練炭

【あらすじ】
それは一つの幻想の終わり――――突然の楽園の崩壊。平穏であった幻想郷は一転して災禍の渦中となる。日常は脆くも崩れ去り、生きる者は生きるために動き出す。そして彼女達は選択を迫られる――
交錯する様々な歴史。新たにして最強の敵の正体とは。そして、明かされる幻想郷の真実。
今、幻想郷最後にして最大の異変が幕を開ける。

※原作に独自解釈を加えた、東方キャラオールスター（星蓮船以前）で送る東方長編二次創作小説です。以前某サイトで連載していた小説の加筆修正版になります。そのサイトは削除しましたので悪しからず。

１：胎動～ｂｅｇｉｎｎｉｎｇ～　（前書き）

こちらはのろま更新ですが、どうぞお付き合い下さいませ。

１：胎動～ｂｅｇｉｎｎｉｎｇ～

１：胎動～ｂｅｇｉｎｎｉｎｇ～

閑かだった。それまでは――

暑くも無く寒くも無く、ただっ広い空には鱗雲が泳ぎ、頬を軽く撫でるような心地よい風が吹く――そんな或る秋の昼下がり。

平常、平和、そして普遍的な一日の一コマ。平坦でありながらも、楽園を感じさせる“外”とは異なる空間――事実ここは『楽園』なのだ。

昨日のように過ぎ行く日々。そして明日も過ぎ行くであろう穏やかな日々。

誰もがそう疑わなかった。否、今までがそうであったため疑いようが無かった。

些細ないざこざが絶えないとは言いながらも、相対的に見れば恒久の平和が約束されているような、この幻想郷では。

絶対的調停者である巫女と、古今東西比類なき力を持つ大妖怪が統括するこの幻想郷では。

あらぬ心配は無用であった。

しかし、何の前触れも無く“それ”は起こった。

誰も気付かない内に、“それ”は静かに、発生した。

そして、着実に進行する。

いの一番に異変に気付いたのは、他でもない幻想郷の統括者、博麗神社の巫女、博麗霊夢だった。

博麗の巫女は代々幻想郷を司る存在として“世界”を監視し、それを覆う結界が正常に機能しているかを随時チェックしている。

いつもだらけながら毎日を過ごしているように見えている霊夢だが、根底では“世界”を担う働きを、殆ど無意識の内にやってのけているのである。

さてその時、境内の掃除も一段落して、いつものように自然の音に耳を傾けながら霊夢は縁側で優雅に茶を嗜んでいた。

今日も平和に時間が過ぎていくことを享受しつつ。

そして今日も賽銭箱が寒々しいことを憂いつつ。

「……」

ふと顔を上げて境内を見渡すが、思わず涙ぐんでしまう程に閑寂とした景色が広がっているだけであった。

無論賽銭箱が温かくなるような気配は微塵もしない。……悲しいかなそれがいつもの光景なのだが。

来るとしたら和菓子や酒やらを求めて集って来る某魔法使いやら某小鬼やら某スキマ妖怪くらいなものだ。迷惑千万なことこの上ない。こちらからもてなすことはあっても、向こうからの供物と言う名の差し入れは一切と言ってほどない。どう考えても不公平であっ

た。

「はぁ……」

ため息を一つ。

そしてこれでまた一つ幸運が逃げた、と更にマイナス方向へ思考が傾く始末である。と言うかもう振り切れてマイナスに突入している勢いだろう。

そもそも彼女の仕事は幻想郷の管理なのであり、その見返りとしてならず者達から賽銭を徴収しようだなんて考えが既にアレなのだが、彼女が本心からボランティア精神で奉仕活動を行う日はまだ当分来そうになかった。

そうしてうなだれた霊夢の目が、不気味な光を放ち始める。

（……守矢んとこの神社のせいね……近い内にまたカチコミする必要があるか……）

ついに無駄に真剣な顔で華麗に責任転嫁＋危険思想を持ち出し始めたその時、

「……ん？」

うっかり顔に出てしまっていた邪悪な表情を引っ込め、正気に戻る。

何となくふとした違和感を感じた霊夢は、茶碗を脇に置いておもむろに立ち上がった。

突如として現れた、微かな異常。

風も空気も空も地面も虫も小鳥も小動物も、その一瞬を境にしても何も変化は見受けられなかった。だが、何か明らかな異常を、霊

夢は持ち前の鋭敏な感覚で察知した。
殆ど第六感のようなものであるが、それが霊夢であるならば話は別である。霊夢の『何となく』は確定と同義だ。それが異変解決のエキスパートと呼ばれる所以の一つでもある。
霊夢は遥か遠くを見据えるように眉を顰め、

（この感じ――結界に綻び？　極小さいみたいだけど……全く、また紫かしら？　この頃見ないと思ってたら……勝手にスキマ使って“外”に行き来するのは構わないけど、後始末くらいは自分できっちりしていきなさいよね……）

そう心の中でぼやきつつ、そのままふらふらと飛び上がった。
結界の綻びと言えど、大きさにもよるが余程のものでない限り、大事に至るようなものではない。
流石に放っておけばえらいことになるのは当たり前だが、そんなになるまで気付かないということはまずありえない。そこまできたら“外”からの干渉の影響で、幻想郷自体がその形を保てなくなってしまうレベルである。
ともあれ、現場は幸いにもすぐ近くの魔法の森の中のようであったので、ちゃっちゃと修復してお茶飲み直そう、といった軽い気持ちで出立した。こういったことは茶飯事とまではいかないが、極稀ということもない。いつものように、部分的に結界を少し強固に張り直せばいいだけの話だ。
そう。いつものことだ。何故か周期的に訪れる交戦必至の厄介な異変に比べたらまだよっぽどマシである。
流石にこの前神社が立て続けに二度もぶっ壊れた時は、もう運にも見放されたと思ったが……まぁ、なるようになるもんである。
そう思いながら、霊夢は目的地へと接近する。

――だが、縁側に残されたお茶が、再び霊夢に飲まれることはなかった。

そして霊夢はまだ知らない。

紫が三日前から原因不明の眠りに就いたっきり、未だに意識が戻っていないことを。

異変は、着実に進行する。

2：出動～emergency～（前書き）

初っ端くらいは連日投下ということで。

2：出動～emergency～

2：出動～emergency～

時間は前後して――

場所は幻想郷から少し離れ、映姫や小町が勤める職場。
名を彼岸と言う。現実世界とは遠くかけ離れた死後の世界――言ってしまえば“あの世”だ。
辺りには色素が半分くらい抜けたような雑草が生い茂るばかりの、ただ殺風景な場所。その中に一際高くそびえる建物――是非曲直庁本部『裁断宮』。ここで死した者達の処遇や、名前の通り生前に犯した罪の裁断を行ったりする、地獄の次にある意味恐ろしい場所である。

その内部のとある長い廊下に、一人分の靴音が響き渡る――四季映姫・ヤマザナドゥだ。
心なしか焦りさえ感じられるような早歩きで、ツカツカと歩を進める。
その表情は堅い。――いや、いつも怒っているのかよく分からない引き締まった顔をしているのだが、それにもまして、である。

「……」

両側にドアが無数に並んでいるこのフロアは、仮眠や休憩のために各職員に備えられた私用の個室が置かれているのだが、映姫はあまりここには寄り付かない。長所であり短所である彼女の生真面目すぎる性格故、起きている間の時間はほぼ職務に従事しているからである。と言うか彼女がいつ寝ているのかは、小町に言わせれば是

非曲直庁の七不思議の一つであるらしい。
そして映姫に言わせれば、小町がいつ働いているのかは是非曲直庁の七不思議の一つだ、と彼女を皮肉ってそう称している。
何だかんだで凸凹が実に調和されたコンビである、と更に周囲の者が茶化しているのだが。

どれくらい歩いただろうか、ようやくある部屋の前で立ち止まる。ドアのプレートには、自分と小町の名が印字されていた。
そして間髪入れずドアを開け放つ。

「小町！　小町起きなさい！　臨時出勤です！」

部屋の二つあるベッドの内の一つの上で、いつも通りと言うか、寝間着である浴衣を盛大にはだけさせ四肢を放り出し涎を垂らして鼾すらかいているという、乙女にあるまじき凄まじい醜態で爆睡していた小町に、映姫の怒声が降り注ぐ。
目覚まし時計よりも音量が勝っていたそれに、小町はビクッと一瞬飛び上がった後、むくりと生気の無い顔を上げて起き上がった。
そして前後不覚な様子が数秒続き、ようやく映姫の存在を確認した。
その果てしなくどうしようもない状態に、映姫も僅かながら頭を抱える。部下がこんなんじゃ分からなくもない。

「……何なんですかいきなり……？　ん～……？　ちょ、まださっき寝てから三時間も経ってないじゃないスか……もうちょっと寝かせてくれても罰当たんないでしょ……」

「……一応念話を送ったはずなんですけどね」

「……そうですか……寝てましたすいません……」

半眼で不機嫌を露わにする映姫などどこ吹く風、枕元にある時計を寝惚け眼を擦りながら見、不平を漏らす小町。とは言えこうやって叩き起こされるのは今に始まったことではないのだが。寝坊は小町の十八番である。

しかし映姫はすぐに真剣な面持ちに切り変わり、愚痴る小町を見据える。

「とりあえず早く準備なさい。緊急事態です」

畳みかけるように理由も碌に言わず、ただ急かす映姫の言葉。流石に唯事ではないと気付き始めたか、小町も少し顔色を変え、そして恐る恐る映姫へと尋ねた。

眠気は既に覚めていた。

「え……と？　マジでどうかしたんスか……？」

「理由は後で話します。とにかくその余りにだらしのない格好を何とかなさい」

その言葉が小町の焦燥感を更に煽る。

小町の背中を一筋の嫌な汗が伝う。

あれ……？　なんか普段より口調がささくれ立っている気が……？

「……も、もしかして人事異動……とか……？　まさか、まさかね、そんなわけないっスよね……？　ハハ……（うん……ぶっちゃけわりかしサボっていたことは認めるが与えられた公務は支障が出ない程度にはこなしているしそもそもまだ映姫様の小言で済んでるし始末書だって月に一度出すか出さないかのアレだからいきなり更迭レ

ベルの格下げなんてありえないってありえない……筈）」

口では冗談めかした雰囲気を匂わせつつ、内心凄まじく狼狽していたりする小町であった。

実際の所、まだ悪い話だと決まったわけではないのだが、何と言うか、何も悪いことをしていないのに突然職員室に呼び出されて訳もなくビビったりする、あのような心境だ。

まあ、とは言っても小町にはサボリという叱られる理由があるにはあるのだが。

しかし小町の明らかに見当違いもいい所な憂慮にも突っ込まず、軽く息を吐き、仕方なく映姫は冷静な口調のままそれを告げた。

「――先程、特務レベル十三・第零機構厳戒体制が十王の宣言を以て発令されました。私達も往かなければなりません。ほら、至急、大至急、準備して下さい」

静かに、しかし意味としては爆弾級の破壊力を従えて映姫は小町に伝えた。

案の定、その言葉に、小町は一瞬で眠気も吹き飛んで驚愕に目を見開いた。そして今聞いた言葉を反芻する。

だが、理解するのには自分でもおかしいくらい時間を要した。

「……十王様達が……？　な、何が起こったんですか……そんなの……」

そう。小町がうろたえるのも無理はない。今だかつて起こった例のない、非常事態におけるランクの最上位に位置する、それ。十王

の出動、それ即ち是非曲直庁――ひいては彼岸の存亡に関わる事態と言っても過言ではない。
小町の問掛けに、映姫は言ってしまったからにはと、簡潔に答えた。

「最悪の事態ですね。最深層監獄の《無間》に処せられていた『三番目』が脱獄しました。現時点で当局の被害者は数百名。現在も同胞と思われる妖怪や妖獣と共に逃亡を続けています」

「《無間》から脱獄！？　って言うか『三番目』って――」

「あーだから詳しい話は後です！　もう既に本部の局員の殆どが出払っ――失礼、誰かから念話を受信しました」

映姫がいそいそと後ろを向いて小声でぼそぼそ話している間、とりあえず小町は浴衣からいつもの制服に着替えるべくクローゼットを開けた。
『三番目』。当然ながら何かの隠語であろうが、その実体を知る権限は小町に与えられていない。それでも噂話程度では、それなりに小町も知識を持っていた。寧ろ都市伝説と言っていいかもしれない。――是非曲直庁では半ば伝説化している囚人（囚妖怪？）のことである。
何百年も前、小町が生まれれるよりも前に、とある二匹の大妖怪が東方の地で激突し、片方の妖怪は余りの狂暴さ故にその戦いの後に生きながらにして閻魔達に裁かれ、地獄の最下層に落ちた――と、そう小町は風の噂で聞いたことがあった。
とは言っても所詮眉唾物であることは否めない、と小町は思っていた。そもそも閻魔は死者を裁く者であり、生者を裁くなんて例は、小町は聞いたことがない。それがいくら生きている間に悪行を積んでいたとしてもだ。

大体もし本当だとしたら、そんなことが秘匿されている筈がない。是非曲直庁の長い歴史の中で、そのような大事件が周知のものになっていないなど、そのこと事態が既に大事件と言っても差し支えないとも言える。……しかし以前にそのことを映姫にそれとなしに聞いてみても、曖昧な返事しかしてくれなかったのだ。

まあしかし、そのことが小町自身にとって何ら不利益でももたらすわけでもないし、そのことを忘れかけていた矢先にこの事態である。

何故映姫はこのことを隠していたのだろうか。

本当に数百年前、大妖怪同士の戦いがあったのだろうか。

だが今のこの混乱の最中では、小町が真実を知ることは叶いそうになさそうだった。

小町が着替え終わると、映姫はもう念話を終えたのだろうか、ドアの前で出発の待機をしていた。

その表情はさっきとは違い、苦虫を噛み潰したように、苛立ちと憂いを帯ていた。

また知らぬ間に何かをやらかしてしまったのか、と焦る小町の口が開くより先に、映姫が小町に告げた。

「……奴らの行き先が判明しました。奴ら、籠城戦でも仕掛ける気でしょうかね」

その言葉に、小町が逸る気持ちを抑えながら、努めて冷静に問い掛ける。

「ば、場所はどこなんですか？」

そして、映姫はゆっくりと口を開き、その名を言う。

――胸騒ぎがする。
この感覚は――よくない。
嫌な予感と言うのは、往々にして当たるものなのだ。
いつの世であっても。

その答えは小町の考えうる限り、最もあって欲しくない最悪な答えであった。

「――幻想郷」

3：暗雲～symptom～

――とある幻想郷の辺境。八雲の屋敷。

紫の私室である十二畳一間の和室には、今三人の人影がある。八雲藍。八意永琳。そして、今尚一向に目を覚ます気配のない八雲紫である。

部屋は水を打ったように静寂が支配し、漂う空気は唯ひたすらに重い。

柱時計の秒針。紫の寝息。時折風でガタつく襖。

そのどれもが、今の緊張状態の藍の耳に入ってはこなかった。

「――っ……どう、でしょうか？　何か変わったことはありませんか？」

心配そうな表情を隠し切れない藍は、未だ若干苦しそうに時折うなされながら眠り続けている紫の側で、彼女の診察をしていた永琳へと我慢できずにか細い声で尋ねた。

これで永琳に来てもらうのは三度目だ。しかし、月の頭脳と言われる彼女でさえ、紫の謎の昏睡状態の原因には考えあぐねいていた。

元より一人一種族の謎だらけの妖怪なのだ。根本的なところから、永琳の知識を以てしてでも分からないことが多すぎた。

「変わった所が無いかと言われれば無いのだけれど……それを吉と捉えるか、凶と捉えるかはちょっと分かりかねるわね」

一通り診察を終えた永琳が顔を上げ、珍しく困惑しきった表情で

呟いた。
そう。変わったところがない。それはつまるところ、『何も分からない』ことを意味していた。永琳の目から見た限りでは、紫を昏睡にまで陥らせた要因が何もないのだ。妖怪に言うのも変な話だが、全くの健康体と言う他なかった。
だが実際、紫は目に見えて衰弱している。
まるで、原因が紫本体でないかのように。
最早、永琳もこの弱点らしい弱点が存在しない八雲紫の異常を誰かに説明してほしいくらいであった。

正直な話、紫が何の前触れもなくある日眠りこけてそのまま冬眠、なんてことは珍しいことではない。寧ろそれが正常だとも言える。早い場合では、初秋から冬眠に入るという、怠惰の権化にして自堕落の極み的な生活態度っぷりを見せたりする。その度に藍へ様々な雑事が舞い込んできて、そろそろ藍の寿命がストレスでマッハ寸前……なのはまた別の話。

――だが、今回は明らかに勝手が違った。

三日前の深夜、藍は大きな物音で唐突に目が覚めた。

（う……ん？　何だ……？）

ふと目に入った、襖の僅かな隙間から差し込む月明かりが照らす壁掛け時計は、午前三時を差していた。
妖しげな時間に、怪しげな物音。……確かめないわけにはいかないだろう。残念なことに屋敷の主人はあんなんだし。
藍は夢現つなまま布団から這い出て、深夜の肌寒い外気に少し身

を震わせながら廊下に出た。
緩慢な動きで左右を見やる。が、一見何もおかしなところは見受けられない。誰かの気配なんてのも、一切感じない。
侵入者……なんてことはないだろう。ただでさえこの屋敷までの道は、幻術の罠が張り巡らされているし、屋敷の周囲には紫直々に張った独自結界が常時展開されている。破れる者などそうはいまい。

「……ん？」

すると、ふと廊下の先に何やら人影のようなものが姿を現した。
一瞬気構える藍。万が一、億が一侵入者であるかもしれない。否定は出来ない。
だが、その姿はすぐに月光の元に晒された。
然してその正体は――

「っ……！？　紫様っ！？」

そう藍が叫び、駆け寄る紫の様相は、足元をふらつかせながら、頭を両手で掻き毟るように抱え、息も絶え絶えに声にならない呻きを漏らし続けている。
どこからどう見ても、明らかすぎる異常な具合だった。
尋常ではない。藍は戦慄を覚えた。
紫がこんなにも苦しんでいる姿を、藍は未だ夢でも見ているかのように思わず呆然としてしまう。
すると、藍が自失している間に、紫はついにその場に膝を付き、嗚咽を漏らしながらそのまま床に倒れこんでしまった。
我に返った藍は、直ぐ様紫の元に駆け寄り、その体を抱き起こす。

「ゆ、紫様！　紫様！？　気を確かに！　一体どうなされたんですか！？」

完全に意識が朦朧としている紫に、藍はとにかく必死に呼び掛けた。
だが、紫からは返事らしい返事は返ってこず、ただ虚ろな目を藍に向けるだけであった。
何が起こったのか全く分からないが、とにかくいつまでもここでこうしているわけにはいかない。そう思い、藍はぐったりとしている紫の体を抱きかかえて立ち上がった。
するとその時、背後から聞き覚えのある声がかけられた。

「藍様……？　どうしたの……？」

藍が振り向くと、そこにはまだ眠そうに目を擦りながらこちらを見上げている橙の姿があった。
無理もない。さっき自分が大声を出してしまったのもあるし、彼女まで起こしてしまったのだろう。
だが、この場においては丁度猫の手も借りたい状況でもあった。
藍はこの状況では、最早何を取り繕っても無駄だと判断し、

「あ、あぁ、ちょっと紫様の具合が悪いようでな、こんな時間に起こしてしまって済まないが、少し手伝ってくれないか？」

「はぁい……分かりましたぁ……」

橙は欠伸混じりに返事し、のろのろと紫を運ぶ藍の後に付いてきた。
それから一晩紫を看病するが、一向によくなる気配が無いので永琳を呼んで……と、それから二日経つのだが、事態は好転しなかった。

苛立ちと憂いだけが、ただ無常に募っていくばかりであった。
紫が一瞬でも覚醒することは、一度もなかった。

「――やはりどう考えてもただの体調不良とかじゃないみたいね。ここ数日誰かと派手に戦り合った、とか言う話は聞いてない？」

「いえ、そんな話は……」

例えそうであったとしても、この大妖怪、八雲紫にどのような支障が来たされると言うのか。少なくとも紫を三日も意識不明の重体に追いやれる存在など、藍は知らない。いや、いないとも断言できた。

ならこの事態は何なんだと言われたら、藍も閉口するしかないのだが。

「となると……何者かからの干渉……黒魔術、呪術の類かしら……その辺になると専門家に相談する方いいかもしれないわね。紅魔館にいる魔法使いや魔法の森にいる人形遣いとかに」

黒魔術。呪術。

一体誰が、こんなにも多大なリスクを懸けてそのようなことを仕掛けると言うのだろう。

紫が誰かから恨みを買っていない、とは藍としては悲しいかなＹＥＳとは断言出来ないが、それでもこれほどまでに殺意すら感じられるような報復をされるほど紫は恨まれるようなことはしていない……と藍は信じている。

実際のところ程度の大小こそあれ紫に私怨を抱いている者はいることはいるだろう。この前だって天界の娘と何があったか良く知らされていないが、柄にも無くマジギレしてボコボコにしたらしいし。

……どうも考えれば考えるほど不安要素が増えていく藍であった。

「そう、ですか……。後ほど訪問してみます。――あ、それと一つ尋ねたいことが……」

「ん？　何かしら？」

藍は少し躊躇う素振りを見せたが、そのまま永琳に言った。

「――メリー、という言葉に聞き覚えは無いでしょうか？」

「メリー？　それは人の名前？」

「えぇ、多分……昨夜紫様がうなされた時にうわ言でその名前が何度か……」

永琳は医療道具を片していた手を止め、暫し手を顎に持っていき思案したが、

「……知らないわね。と言うより、その辺は余所者の私よりあの巫女や冥界の令嬢等に訊いた方が早いかも知れないわよ？」

そう切り替えされて、藍は今気付いたように、うっかりした表情を顕にした。

「あ……すいません。ここ数日すっかり気が動転してしまって……」

「いえいえ、まあ私の方でも出来るだけ調べておくわ。何かあったら逐一遣いの者に便りを送らせるから」

「どうかお願いします……」

そうして、ひとまず役目を終えた永琳は立ち上がり、藍は玄関まで彼女に付き添った。

願わくば、このような沈んだ気分になりながら、明日も永琳を出迎えるようなことはしたくないと思いながら。

「じゃあ、お大事にね。……とは言っても、あまり役に立てなくてごめんなさいね」

「いえ、そんなことは……こちらこそ度々御足労を煩わせてどうもすみません。もし何事も無かったかのように起きられたら、すぐに謝礼させますので」

「ふふ……分かったわ。それじゃ」

そう言って、永琳は屋敷を去っていった。因みに聞けば彼女は幻術の類は効かず、一人でも帰っていけるとのことだ。

永琳の後ろ姿を見送り、藍は図らずも重いため息を吐いた。何も永琳に失望しているわけでは決してないが、これほどまでに靄が晴れないとなると、憂鬱にもなるというものだ。

と、そこで斜め後ろから控え目に服を引っ張られるのを、藍は感じ取った。

振り返ると、果たして橙がそこにいた。

「橙？」

「紫様、大丈夫なの？　死んじゃったり、しない？」

まるでこの世の終わりでも来たかのような表情で、橙が藍を見上

げて尋ねた。
無理もない。こんなこと、今までに一度たりとも無かったし、連日で医師が訪問してくるとなると尚更だ。
誰よりも橙のことを分かっている藍だからこそ、その不安でいっぱいになった悲痛な思いは痛いほどに共感できた。
そんな橙に、藍はさっきまでの沈鬱とした表情をすぐに引っ込めて、笑顔で対応した。

「あぁ。大丈夫に決まってるさ。今はちょっといつになく体調を崩されただけだ。一週間もすれば、元の紫様に戻っているよ」

「本当……？」

「本当さ。それに私達が紫様の回復を願わずにどうする？　紫様も今病気と闘っておられるんだから、私達も紫様を応援しないと。な？」

「……うん！」

橙は少しは藍の言葉によって不安を払拭したか、藍へと笑みを浮かべて頷いた。
と、そこで、橙にそう言い聞かすと同時に、自分自身にも希望的観測を持って言い聞かせていることに、藍はふっと気付いた。いや、気付かされたと言っていいか。
そう。自分だって不安なのだ。橙には悪いが、これだって自覚はしていないが恐らく空元気に過ぎない。
何も出来ない自分がただただもどかしくて、藍は唇をぎゅっと噛むしかなかった。
果たして一週間後に、紫は本当に回復しているのだろうか？
そう言った自分でさえ、勿論そんな確信は持てない。

現状は、全ては神のみぞ知る、と言ったところだ。

何気なく空を仰ぐ。
少し曇ってきただろうか。日が陰ってきた。
いつもはそう思うだけかもしれなかったが、今はその暗雲一つにさえ、藍は不吉な予兆を感じ得ずにはいられなかった。

３：暗雲～ｓｙｍｐｔｏｍ～（後書き）

これより大体週一更新。

4：憂鬱～resource～

4：憂鬱～resource～

「咲夜」

「はい。何か御用でしょうか、お嬢様？」

「……退屈だわ」

灰色の雲がここ一帯を覆っている、ある意味天気の良い昼下がり。本日二桁目に突入した傍若無人な紅魔館我侭当主、レミリア・スカーレットのお馴染み殺し文句、「退屈だわ」が発動した。

しかし完璧で瀟洒なメイド、十六夜咲夜は動じない。これ如きで狼狽していては、紅魔館のメイド長は勤まらないのである。

「お嬢様……先程美鈴と一緒にスピア・ザ・グングニルでウィリアム・テルごっこをしたばかりじゃないですか……」

「いや……半分ギャグで提案したんだけどねアレ……まぁ帽子が焼ききれただけなのは不幸中の幸いだったかしら」

「とは言っても軽くトラウマを植え付けてしまったようですがね。流石に顔面めがけてグングニルが飛んできたら誰でも死を覚悟しますよ」

「私のコントロール技術を以てすればあんなの容易いわ。林檎を打ち抜くどころか達磨落としさえ出来るわね」

「そのわりにはあの壁……元からあんな模様でしたっけ？」

「うっさい！　それよりも「私もやるー」とか言ってレーヴァテイン振り回しながら乱入してきたフランを取り押さえるので疲れたわ。……あの子の場合本当に『殺り』かねないし」

「まぁ、えぇ……あの時は美鈴も諦めたのか辞世の句を詠み始めていましたから」

「でもあの時の顔ったらなかったわね。全く、この紅魔館の玄関を任せているんだから、もっとしゃきっとしてほしいものだわ」

「では後で教育しておきましょう」

「よろしく」

さらりととんでもない話に花を咲かせる主従二人。紅魔館は今日も今日とて概ね平和な日々を迎えているようであった。

因みに美鈴はこんな扱いを受けながら、今も「生きているって素晴らしい！」とつくづく実感しつつ門番の仕事に勤しんでいる。紅魔館で働くには常に死と隣り合わせである意識が必要なようである。

「――で、上手く話を逸らしたみたいだけど、私はそうは欺かれないわよ」

そうレミリアは玉座に深く腰掛けながら薄く笑みを浮かべ、しかし鋭い視線を咲夜に向けた。

その軽く殺気すら感じ取れる眼差しを、咲夜は自然体で受け流す。

傍から見たら一触即発のような雰囲気だが、彼女たちにとっては

ちょっとした遊びでしかなかった。
咲夜は軽く苦笑いしつつ、
「いえ、まあそんな気は無かったんですけど……そうですね……」
無い知恵を絞って半ば真剣に、半ばやり投げに打開策を思索する。
紅魔館の雑事をほぼ全て自ら一人でこなす要領良さはあっても、こういった頭の柔らかさ（？）と言うかユーモアが必要とされる作業はあまり咲夜は得意ではなかった。
その上今日は、いつにも増してレミリアの「退屈だわ」が乱発されている。流石にもうネタ切れだ。
もういっその事そろそろ紅茶に睡眠薬でも入れて今日はお休みなさってもらおうか、と多少不穏な考えが頭に浮かび始めた咲夜であったその時、名案が浮かんだ。
「あ。なら……パチュリー様にご相談されては如何でしょうか？あの方なら私以上に突拍子も無いことを思い付いてくれそうですし」
言ってから多少語弊があったように感じたが、まあ間違ったことは言ってないのでそのまま何も言わなかった。レミリアも否定していないところが、彼女もパチュリーのことをよく理解していることを窺わせる。
「パチュ？　彼女なら図書館でひたすらあの白黒魔法使いを消極的に手篭めにする方法でも模索してるんじゃないの？　この頃見ないし――」
と、そこで広間の大扉が地響きのような音を立ててゆっくりと開け放たれた。
二人がそちらの方へと目を向ける。

全身で扉を押して、そこから現れたのは、果たしてパチュリーであった。

「誰がよ。全部聞こえてるわよ」

寝起きのようなジト目でレミリアを睨みながら、不機嫌そうな声で呆れ半分で言い返す。

その目の下は隈がありありと窺えた。まるで寝起きと言うか、寝てないと言ったほうが適切かもしれない。

さっきのレミリアの言葉は実際冗談かと思ったが、この有様をみて強ち間違ってはいないんじゃないだろうか、と咲夜はパチュリーに色々突っ込みたい衝動を感じたが何とか自制する。

一方レミリアはと言うと、悪びれた様子も見せずいけしゃあしゃあと友人を出迎える。

「あら、貴女からこっちに出向いてくるなんて珍しいわね。何用？私の興味を惹くことならば大歓迎だけど」

相手の都合もお構い無しに、そうまくし立てるレミリア。対してパチュリーはまずため息でそれに答える。

「はあ……別に貴女の暇潰しになるかは私には分かりかねるけど、報告しなければならないことならあるわ」

「んー？　仰々しいわね。何かあったの？」

実際の所、パチュリーが図書館の外に出るだけでも年に数回の珍事であるのに、こうして自ら用事を携えて現れるなんて、レミリアは気にも留めていないようであったが青天の霹靂意外の何物でもない。

そんなパチュリーがわざわざ出向いて来るなんて……本人には悪い気がしたが、咲夜は思いがけず何か良くないことが起きるような感じが心中に沸き始めた。
……まあそんなことどうせ杞憂に過ぎない、と咲夜が思い直したのも束の間、

「……」

パチュリーが二人から視線を逸らし、壁全体にガラスが張られた大窓の向こう側に目を遣った。そして、平坦な声で告げた。

「――侵入者よ。と言っても屋敷の中じゃなくて、紅魔館周辺の話だけど。さっきここを中心とした半径五百メートルに張ってる結界が数十もの『何か』を感知したわ。でも、ここまで近づいてくるとなると、ここ以外に何か用があるとは思えないし。一応は主である貴女の意見を仰ぎに来たんだけど……」

外は未だに雲の隙間から太陽の光が一筋も差し込むこともなく、今にも雨でも降りそうなくらいの薄暗さが辺りを支配している。
咲夜は窓へと近寄り、そこから外を俯瞰する。
ここから屋敷の前の広場、鬱蒼とした森、そして湖、更にはその向こうまで眺めることが出来るが、咲夜が一見した所何も異常は見られない。
しかしパチュリーの言う所によると、『何か』が確実に近づいて来ているらしい。
数名の例外を除いてこの幻想郷に居る者なら、紅魔館に近づくことがどれほど危険極まりないことか分かっているはずだ。
それに対象は十数という。明らかに、何かおかしなことが起きているのは明白であった。

「……ちょっとレミィ？　聞いてる？」

「……お嬢様？」

咲夜とパチュリーがさっきから黙りこくってしまっているレミリアに声をかける。

その当人は、二人の声が聞こえていないかのように、玉座から身を乗り出して窓の外を見ていた。

二人が不審がる中、レミリアはいつになく眼光を刺々しくして、まるで獲物を狙う荒々しい猛獣のように虚空を睥睨している。

「……咲夜、念のために万一の事態を予測して、屋敷の者達に今から二十四時間細心の警戒の配慮を怠らないように言っといて頂戴」

「はい。そのように。……このことは美鈴には？」

「いいえ。入り口まで移動するの疲れるもの。まあ門番だし、不測の事態にいつでも備えてる筈だから大丈夫でしょ。気が向いたら伝えてあげて」

「……はあ。一応後で伝えておきます」

そして再び咲夜がレミリアに声をかけようとした――その時、

「ッ！？」

咲夜は空気が張り詰めるのを感じた。

虫の知らせ、とも言えるだろうか、ともかく『何か』が起こってしまう、『何か』が迫ってきていることを五感全てが告げていた。

だが――それの正体が分からない。
それはコンマ一秒にも満たないような間隔での出来事。
いやに時間が経つのが遅く感じられるが、その間自分は何も出来ない。身体が言うことをきかない。『予感』に対して、咲夜は時を止めるにまで思考が追いつかない。
そして、気付いた時に反応できなかった時点で、既に『何か』は起こってしまった。

途端、

窓ガラスが盛大な音を立てて砕け散った。

何の前触れも無く、ガラス自体がそのまま爆発したかのように。

「なっ……！？」

「っ――お嬢様っ！！」

咄嗟に咲夜がレミリアの身を案じて向き直る。
襲撃！？　狙われた！？　様々な憶測が頭を駆け巡る。しかしとにかくはお嬢様を護る事が第一！
一瞬でレミリアの元へと駆け寄――ろうとした咲夜だが、レミリアは顔の前で何かを摘まむようにして片手を上げた状態で静止していた。
パチュリーは追撃に備えて、いつでも反撃の構えを取っている。
だが、静寂はそのまま十数秒続き……ついに第二撃がやってくることは無かった。

「い……今のは？」

「さあ……？　もう来たのかしら。手荒い宣戦布告ね、全く……」
「えぇ。まさかここまであからさまに……お嬢様、お怪我は……？」
その咲夜の問い掛けにレミリアは答えず、
「……クスクス……クスクスクス。いいわ。実にいいわ。まだ幻想郷にここまで出来る奴がいたのかしら」
突然喉を鳴らして不気味に笑い出し、薄笑いのまま手中にあった『それ』をパチュリーに投げ渡した。
「え？　わっ……っとと。何、これ……ッ！？　銀の銃弾……っ！？」
「なんですって！？」
銀の銃弾。言わずもがな、吸血鬼の弱点の一つである。
そんなものを扱える者なんて……それ以前にレミリアにこうも露骨に命を狙おうとする者など、幻想郷にいただろうか？
しかしレミリアはそんなこともお構い無しに、喧嘩を振ってきたまだ見ぬ愚か者へと完全に興味が移っていた。
目が狂気に染まり、口元が邪悪に弧を描く。
「私に気配を悟られることのない距離からの射撃……少なく見積もって１ｋｍ以上離れたところから針の穴を通すような精密さで私を射抜くその実力。そしてこの銀の銃弾……ふふ……ふふっ……
……何かしら。『何』なのかしら、コレ。ねぇ？」
「……っ」

我が主ながら、咲夜はレミリアのその形相に背筋が凍った。
前に見たのはいつだろうか、こんなにも『楽しそう』なレミリアを見たのは。
獲物を前にして、うずうずしている様子はまさに猛獣。静かなる怒気を孕み、四肢を畳んで今にも飛びかからんとする猛禽類だ。
ただ一つ、猛獣と違う点があるとすれば、それはとてもシンプルで絶対的なこと。
彼女は吸血鬼なのだ。

「――前言撤回よ、咲夜」

立ち上がり、悠然とした態度で何かを歓迎するように両腕を広げる。
困惑する咲夜やパチュリーとは裏腹に、不敵に笑む。
久しぶりの強者を前にして、レミリアの血は早々と煮え滾っていた。

「どうやら、暫くの間は退屈せずに済みそうだわ」

４：憂鬱～ｒｅｓｏｕｒｃｅ～（後書き）

連休でハシャイジャッテ

5：侵入～outbreak～

5：侵入～outbreak～

霊夢が凡そ目星をつけた場所へと降り立つと、そこは異様な雰囲気が漂っていた。

近づくにつれて感じてはいたが、神社で察知した微かな違和感とは比べ物にならない程の淀んだ空気が充満していた。様々な力が混ざり合って混沌とした異空間。

ここは幻想郷であって、幻想郷ではなかった。

不安感漂う中、霊夢は顔をしかめざるを得ず、眉を顰めながら辺りを見渡す。

……生の気配が全く感じられない。改めて目を凝らしたり耳を澄ますが、小動物どころか虫の一匹さえ見当たらず、聞こえるのは太陽の光を遮る木の葉がざわめく不気味な音だけ。

ここでは寧ろ正常な自分の方が異常なのではないかと言う錯覚さえ抱かせる。

（ちょっと……何よこれ。まだ二、三分しか経ってないのにここまで……？）

予想以上に事態が深刻化していることに、驚きを隠せない。何が起きようとしているのか、今の時点では霊夢も判断の付けようがなかった。

――とにかく結界の綻びを早く見つけなければ……

そう思い、急いでこの根源と思われる場所を探し始めた。

「ここ……かしら？　スキマと言うよりは穴って言うか……本当に何なのよこれ」

数分後、ようやく霊夢がそれと思しき場所へと到着した。
この気分の悪くなるような息苦しい空気のせいだろうか、さっきから頭が変にクラクラする。
今日は厄日かしら……なんて思いつつも、その不自然に宙に浮いている穴へとゆっくり近づいた。
直径は二メートル程はあるだろうか。間近で見ると、なかなかに巨大であった。
その中はと言うと、どこまでも暗い闇が蠢いており、全くと言っていいほど何も見えない。どこに続いているかなど、見当すらつけようが無かった。
裏に回って見てみるも、同じく深淵が顔を覗かせているだけであった。奥行きも、天井も、底も見えない。ただ晦冥とした黒が横たわっている。
あまりにも、奇妙な痕跡。
こんなことが出来るのは霊夢の知る限り紫しかありえないのだが、どうもそんな気がしなかった。
何だろうか、いつもは感じない不吉な予感が胸に蟠る。

「……まあとりあえずこれを閉じることが先決かしらね。どうやらこれが異変の原因っぽいし」

あまり釈然としないまま、とにかく霊夢が目の前の不思議現象を片付けるべく数枚の札を取り出した。
見たこともないようなスキマだが、恐らくいつも通りのやり方で修復できるだろう。……多分。
そろそろ本気で気分が悪くなってきたので、早速事に取り掛かろ

うとした――が、

「――――ッ！！」

突如察した、殺気。

それは背後から、突き刺さるような鋭利さで霊夢を脅かした。

一瞬、息が止まるほどの圧倒的な威圧。

迷う間もなく、恐怖に突き動かされるような形で霊夢は振り向きざまに手中にあった札を投擲した。

霊夢の手を離れた札は、こちらに向かって飛んできた何かに巻き付き、そのまま地に落ちた。

それらは、弓矢。

しかも三本。

形状から見て、殺意を持たずして放った物とは到底考えられなかった。

「……悪い冗談ね。誰なの？　出てきなさい」

すると、霊夢の声に答える様に、草木の陰からぬぅっと何者かが姿を現した。

女性だろうか、長く伸びた髪は腰まで達している。

その目は穏やかに見えるが、その内には確かな剣呑さを仄めかせていた。

喪服のように黒に染まった見慣れない衣服を着ており、大きなつばのついた、これも漆黒の帽子を被っている。

帽子の下から見え隠れするのは、儚さを髣髴とさせる浮世離れした美しい容貌。

その右手には長弓。どのように三本連続で射たのかは分からないが、どうやらそれから放たれたのは間違いなさそうであった。

「ハッ！　流石はここの巫女さんってとこか。やっぱり一筋縄ではいかないねぇ」

「……誰？　アンタ、ここの住人じゃないわよね」

深刻な態度の霊夢とは裏腹に、相手の女は飄々とした素振りで答えた。

「その通り。――でも今から幻想郷は私達の本拠になる」

「はぁ？　寝言言ってないでさっさとこの穴を――」

そこまで言った時、霊夢は不意に息苦しさを感じた。

と、次の瞬間、そのまま倒れてしまいそうな程、強烈に意識が朦朧とし始めてきた。

身体が自分のものではないかのように、言うことを聞かない。まるで身体の中心から血の流れが途絶えていくような感覚。足元が覚束なくなり、視界の焦点が合わなくなる。世界が形を失い、崩れていく。

「っ！？　ちょ、っと……な……にこれ……」

混乱の最中、霊夢は痺れて殆ど使いものにならない手足を何とか動かして近くの大木に身を寄せるも、既に一人の力では立つことすら儘ならぬ状態であった。

すると女は大きな黒帽子のつばを傾げて、霊夢のその様を観察するような目で見下ろした。

「ふぅむ……ようやく効いてきたってとこか。甲李！　その辺でいい！　後は時間の問題だ。……って分かってはいたけど時間掛かる

もんだな。それでも所詮人間、か。明らかに致死量超えてると思うが……後の副作用が少し気掛かり――」

「ア、アンタ……一体、何やった……の……」

息も絶え絶えに霊夢が女に訊く。

その女からは涼しげな、余裕ある声で、

「うん？　そうだな……あくまで穏便な交渉、と思ってもらいたいね。ここまま生かしてやるだけでも感謝しなさいな。この博麗大結界とやらを維持するのには、どうやら貴女が必要不可欠らしいからね。だから生かしておく必要がある。……今は、だけど」

高圧的な態度のまま霊夢に言い放つ。

屈辱的な仕打ちだった。

不意打ちだとは言えこうまで形成を決定的なものにされ、生殺与奪さえ相手の手中に委ねられている、この状況が。

許せなかった。

不甲斐ない自分が。それにも増して、どこから降って湧いたかもしれぬ、この不届き者が。

「ッ！」

霊夢の瞳に、強い光が宿る。

このままただ一方的にやられる博麗霊夢ではない。

「舐めるんじゃ……ないわよっ！」

霊夢が渾身で気力を振り絞り、懐からスペルカードを取り出した。

「霊符『夢想封印・集』！！」

瞬時に数十もの光の玉が霊夢の前に現れる。
そしてそれらはまるで意思を持った生物のように、女へと凄まじい速度で一目散に向かっていった。
全方位から女を囲む。隙は一切無い。
しかし女はその場から動かない。逃げる素振りを全く見せようとしない。
代わりに弓矢を一本、光の弾幕に向けて素早く射た。
まず一つの玉に当たったかと思ったら、それはすぐに雲散し消え去った。
だがそれだけでは終わらない。
弓矢は急に直角に曲がったり、折れ返したり、あり得ない軌道を繰り返しながら、次々と光の玉を潰していった。
まるでシャボン玉を容易く、造作も無く消すように。

「な……！？」

「ふぅ……まだ動けるとはね。……だけど、そうでなくては張り合いがない。さぁ、これで終わりってわけじゃないだろう？　やるならとことんやろうじゃないか。なぁ」

あからさまな挑発を繰り出す女に、霊夢は一瞬反応しそうになるが、寸でのところで自制した。
ここで馬鹿正直に突っ込んでいったらまさに相手の思う壺だ。この余裕さの裏には何かあるに違いない。
かと言ってこのまま引き下がるわけにもいかない。
状況は果てしなく不利。だが、勝算はゼロではない。

「……」

思案すること数秒、霊夢は女から目を逸らさないまま、震える身体に鞭打ち立ち上がった。

自然体で構える女。先制してくるようには見えない。霊夢の攻撃を待っているかのようであった。

そのまま両者が動かないまま、緊張した時間が暫く流れる。

「……」

「……」

動かない。

「……」

「……」

動かない。

「……」

「……」

動かない。

「……――ッ」

そして、ついに先に動いたのは霊夢だった。
やはりしたり顔で、女は霊夢からの攻撃に備えようやく構えをとる。
しかし霊夢は止まらない。
それは矜持の表れ。決して己の実力を過信しているわけではない。自分なら『出来る』という根拠のない、しかし絶対的な自信が霊夢には備わっている。
事実、彼女に負けのイメージは常に存在しない。

「――はぁっ！」

気合と共に札を投擲。均一に投げ打たれた二十枚の札は瞬く間に槍のような鋭い弾幕と変化し、あらゆる方位から女へ襲撃する。
スペルカードなどではない。それは純粋に、博麗霊夢自身としての実力。故に誰よりも強い。
それだけ、この女を霊夢は決して野放しには出来ないレベルであると判断していた。
だが――

「ふっ」

女はその攻撃を『じっくり』と確認するかのような仕草を見せたかと思うと、その場から消え去った。
――常人ならそのように見えただろう。だが、霊夢はしっかりと女が予備動作もなしに大きく跳躍したのを見逃さなかった。
対象を見失った弾幕が互いにぶつかり爆ぜる。森が震え、砂と木の葉が舞い上がる。
視界は最悪。それでも、この場において重要なのは視覚ではない。五感以外の感覚を研ぎ澄ます。そうして、自分の世界に相手を捉

える。

「見えてるわよっ」

息を吐き出すと共に護符を展開。僅かな間をおいて、砂煙の中から女が繰り出してきたのは弓の先端で刺突。だが霊夢の防護結界の方が勝ったか、女はすぐさま獲物を引っ込めて大きく一歩後退する。

見ると弓の両端は刀のような形状をしており、矢を番えていない今、女は弓を剣のように構えていた。

そして霊夢は力強く踏み込み前進。吹き荒ぶ風を身に纏って、札を片手に素早く女の懐に入ろうとする。

しかし、女も弓を肩に担いで袈裟切りの体勢を取る。そして霊夢へと突進。

「疾ッ！」

「破ッ！」

交差する二つの疾風。

互いに距離をゼロに詰めての接近戦。故に必殺のぶつかり合い。まともに当たれば、最悪死は免れない。

そして――

「――――」

砂埃に交じって確かに鮮血が飛んだ。

……

……

……

……

風が、凪ぐ。

今まで森全体が息を止めていたかのように、張り詰めていた空気が若干和らぐ。

数メートルの距離を置いて背を向け合っていた二人だが、先に膝をついたのは霊夢だった。

「っ……ぐっ……」

おかしい。まず霊夢が感じたのは、その一言に尽きた。

確かに霊夢は交差する瞬間、空いていた手を懐に入れて防護結界を展開した。それも二重に。普通ならばあらゆる攻撃は少なくとも攻撃される瞬間を見極めれば、確実に通らない筈だ。そして事実、霊夢は攻撃を見切っていた。

しかし、女の攻撃は霊夢を衣服のみならずその柔肌を容赦なく裂いた。

致命傷では無い。だが、機動力は著しく欠かれた。

女が振り返る。

膝をつき、自分を睨めつける霊夢の視線を真っ向から迎える。

「まさか、もう終わりか？」

「えぇ、終わりよ――貴女がね」

瞬間、極太の光の柱が女目掛けて光速で降りてきた。

当たり一面が目も眩む程の光に包まれる。

その事態に気付いた時には、既に遅かった。
自身の真上を見上げるより先に、光の柱が女を包み込む。
避ける間も無い、反撃する間も無い直撃。
轟音が辺り一帯に響き渡り、そこを中心として発生した衝撃波が放射状に巻き起こる。
まるで……いや、実際爆発であった。

「……はぁ……はぁ……っ……あーもう」

爆発が収まり数秒、ふらつきながらも霊夢は悪態をつきながらも確かに両足で立ち上がる。
荒い息を上げながら、女へと歩を進める。
あの時――二人が交差する瞬間、霊夢は罠を――遅延効果を施したスペルカード『八方鬼縛陣』を足元に密かに仕掛けたのだ。猛スピードで突進してきた女が、自分と擦れ違いざまに攻撃した後、おおよそ数秒前の自分の位置にくることを見越して――
そして計画通り、女は脳天からスペルカードの直撃を受けた。

「……」

足元には女の被っていた黒帽子。
霊夢はそれを一瞥して、くしゃりと踏み潰す。
視線の先には、さっきまで威丈高だった女が無残にも仰向けに倒れていた。
さっきとは立場が一転し、霊夢が女を見下ろす形となった。
霊夢は苛立たしげに髪をかき上げ、

「はぁ……ったく、本気で厄日ね。――さて、と。とりあえずふんじばって色々と吐かせますか。……と、その前にこの結界の穴を何とかしないといけないわね」

そうして霊夢が再び歩を進めようとする――が、

「……もう……嘘でしょ？　面倒くさいわね……」

立ち上がったのだ。まるで何事もなかったかのように、衣服に付いた汚れを払いながら。

徐に霊夢を見据える。その瞳は剣呑さを増し、眼光が怪しく光る。

まさかこんなにもすぐに立ち上がるとは霊夢も思っていなかったようで、驚愕と困惑が入り混じった表情を浮かべる。

決して手加減はしていなかった。と言うかかなり本気でぶち込んだ筈であった。

だがそんなこともお構い無しに、女は先程より口調を荒げて、

「不意打ちとはやってくれるじゃないか。えぇ？　文句言うつもりはないが、ちょっとばかしやり返さないと気が済みそうにないね、これは」

「アンタが勝手に呆けてただけでしょ。これ以上暴れたら、痛い目見るのはそっちよ」

「ハハァッ！　言ってくれる！」

そう哄笑すると持っていた弓を脇に放り捨てて、どこから取り出したのか、いつの間にか立派な青龍刀が女の手に握られていた。

慣れた手つきでそれを振るう。まるで枝を振るうが如く軽々と。

ヒュン、と風を切る音が響く。

すると、それだけで触れてもいないのに刀の鋭い風圧が見えない刃となって、霊夢へと襲い掛かった。

地面を抉りながら、猛スピードで迫る。

「っ！？　ちっ！」

咄嗟に横へ跳んでそれを躱す。だが息吐く暇もなく、女がこちらへ接近しつつ第二撃を放つ。

しかし霊夢は落ち着いた動作で、足元に一枚の札を投げ落とした。瞬時に現れる不可視の防壁。と同時、甲高い金属音が木霊する。なんとか攻撃は防いだ。しかし目の前には女が既に青龍刀を振りかぶっている体勢に入っていた。

続けて霊夢は流れる動作でスペルカードを取り出し、

「ハハッ！　無駄無駄！　そんな『お遊び』じゃあ、私を殺すことなんて出来ないよ！」

スペルカード名を宣言しようと、

「夢符『二重――痛っ！」

するがそれは叶わなかった。

首筋からの刺すような、噛まれたような突如とした鋭い痛み。

反射的に手をそこに遣る。すると、何かが指先に触れた。

縄のような……しかし指よりも太い……それはまるで、蛇……

そこまで知覚するや否や、霊夢は意識が急激に遠退くのを感じた。

最早抗う事の出来ない、先程とは比べ物にならない意識の混濁。

思わずその場に膝を付き、そのまま崩れるように倒れこむ。

（ちょっ、と……このままじゃ……ヤバ……）

だが霊夢は正常に思考出来たのはそこまでだった。

次第に目の前が真っ暗になる。

もう何も聞こえない。
何も考えられない。
何もかもが、潰えた。

そしてわけが分からないまま、霊夢は深く暗い闇の中に、堕ちた。

5．5：侵入〜outbreak〜－another side－

5．5：侵入〜outbreak〜－another side－

突然事切れたように卒倒した霊夢を見た梓尤（しゅう）は、青龍刀を振りかぶったまま、驚きの入り混じった困惑した顔で固まっていた。

まだ自分は何もしていない。さっきの攻撃だって防がれた。しかし現にこうして霊夢は倒れている。

ならば――

「チッ」

――邪魔しやがって。

興が削がれたとはまさにこのこと、と言わんばかりの表情を浮かべる。

まるで、お気に入りの玩具を突然眼前で掠め取られた子供のように。不機嫌さのあまり相貌を歪める。

いけ好かない

このような展開は、梓尤が一番嫌うものだ。

そしてぞんざいに青龍刀を投げ捨て、低い声で虚空に向かって話しかけた。

「……おい、甲李（こうり）。こりゃ何の真似だ？　毒蛇なんて使いやがって。私は何も指示してないぞ」

すると、徐に梓尤の二、三メートル前に黒い靄のようなものが大気中から染み出すようにして現れた。

それはどんどん人の形を保っていき――最終的には完全な人間の

形へと変貌した。
体格は決して大人とは言い難い少女。小柄なその身体に、不相応な大きい群青色の外套を羽織っている。
すっぽり体が包まれている外套の上に波打って流れるのは、銀色の髪。梓尤程ではないが、背中を覆うまでは伸びているだろうか。
首には黒ずんだ太いロープのようなものが巻きついている――蛇であった。時折鋭い牙を威嚇するように見せつける。それが今しがた霊夢の首筋を襲った鋭い痛みの正体であることは想像に難くなかった。
そしてギラついた今の梓尤の目とは対照的に、甲李のそれはどこまでも穏やかで、無機質で、冷淡であった。
現れて数秒、彼女はその目を霊夢に向けていたが、ようやくゆっくりと梓尤にも向ける。
と、今まで威勢よく怒気を放っていた梓尤が、打って変わって決まり悪そうに甲李から目を逸らした。
そんな梓尤にはお構いなしに甲李は、あくまで静かに言い放つ。

「……調子に乗りすぎ。こんなところで全力を出すなんて愚の骨頂。曲がりなりとも貴女は一戦力なのだから、早々に脱落しては私としても白銀(しろがね)様に合わせる顔が無い。もっとよく考えて行動して」

単に不満をぶつけると言うよりかは、聞きわけの悪い子を諭すような言い方の中には、見た目の幼さを感じさせないような威圧感がありありと感じ取れる。
片や女性にしては高身長。片や幼げな少女。身長差こそは優に三十センチ以上はあるだろうか。完全に大人と子供であるが、見たところによると甲李の方が二人の上下関係的には僅かに上位に位置するように思われた。
そんな高圧的な甲李の発言に梓尤は反射的に言い返す。

「おいおい、別に全力を出すつもりじゃなかったっての。私らの与えられた任務は『隠密に侵入し巫女をおびき寄せる』ことだろ。それくらい分かってる。本気出して巫女を殺しでもしたら、それこそ本末転倒だ。折角の魁娥・白銀御前（かいが・しろがね）の『因縁の虐殺場』がぶっ壊れてしまうからな」

「それにしては巫女の攻撃を直で食らってたけど。あれも計算だったの？　完全にその後頭に血が上って激昂していたように見えたのは、私の気のせい？」

凍りつくような視線を梓尤に浴びせながら、平坦な声色で的確且つ嫌味とすら受け取れる指摘をする甲李に、思わず梓尤の言葉が詰まる。

図らずも一筋の汗が梓尤の頬を伝う。やはり対照的に甲李の表情はどこまでも冷然としている。

実際のところ梓尤には霊夢と戦り合ったところで、一つの傷も負うことなく圧倒できる絶対の自信を持ち合わせていた。

親玉である白銀は別として、他の誰にも、目の前の甲李にだって引けを取る気は微塵もしていない。

今まで勝負事で敗北らしい敗北を喫したことがない梓尤にとって、それは当然と言っても差支えなかった。

しかし蓋を開けてみると、想像以上にやり手だったことに表情には出さないが一抹の驚きを禁じ得なかったわけである。

何よりも、霊夢に『隙が無かった』のが一番大きいだろうか。ただ己の力をぶつけるだけなら誰でも出来る。対個人の戦闘において、最も重要であるのが『隙を見せない』ことである。それを会得すれば、どれだけ格上の相手であれ、時にはいとも容易く勝利出来るものなのだ。

そして実際戦ってみて、霊夢は知ってか知らずしてか、その達人とも言える域で梓尤を翻弄した。

一言で言えば、梓尤にとってこれは油断に他ならない失態。それも一番苦手な奴にその様を見られた。
梓尤は静かに深いため息を吐き、甲李から目を逸らして倒れている霊夢をキッと睨め付けた。
「――今は色々“縛り”があったから虚を突かれただけだ。次相見えることがあれば、こうはいくか。……けっ、命拾いしやがって」
捨て台詞のようにそれだけ言い残すと、早々に踵を返して甲李に背を向け、森の中へと歩いていこうとした。
「どこへ行くの？」
「頭冷やしに行くんだよ。お前だって私の隣で延々と愚痴なんて聞きたくないだろ」
そう苛ついた声で返答する梓尤。今口を開けば文句しか出てこないのは梓尤自身も分かっていた。まぁ、数十分もすれば気分の切り替えも出来る。そのことも自分自身が一番よく分かっていた。
だが甲李は相も変わらず抑揚の無い声で告げる。
「それは出来ない相談。貴女にはちょっと今やってもらいたいことがある」
「……あぁ？　巫女を神社に連れてくなんて一人でも出来るだろう。それにお前は牛やら虎やら使役出来るんだしよ」
「牛やら虎じゃない。饕餮（とうてつ）と窮奇（きゅうき）。いい加減覚えてほしいところ」
「あーあーあー今はそんなことを言いたいんじゃないだろ。で、何

なんだ？」

最早苛々を前面に押し出し、早く会話が終わってほしい一心で梓尤は甲李へ発言を促す。ただでさえこの巫女のせいで苛立っているのに、いつもの調子でこの甲李と会話していたらうっかり不毛な戦闘に突入しないとは限らない。

もしその本題がまたもや梓尤にとってどうでもいいことであったなら、もうこの短気な性格の本領を発揮せざるを得ないかもしれない。

そもそも甲李とのいざこざなんて今までのことを考え出したらそれこそキリが無いくらいだ。

だが、甲李は梓尤の取りとめのない予想を大分外れた内容を切り出した。

「――誰か見てる。南西の方角。標的は十メートル先。誤差は数センチ」

「……何だと？」

梓尤は眉を顰めて訝しげに呟いた。自分と甲李という存在がいながらも、幻視とは言え気づかれずに覗き見されていた事実に目を見開いて一驚する。――いや、寧ろ見られていると言う事実よりも、そのような存在がいたことに。

甲李が言った方向を見る。しかし梓尤には視線すら感じられなかった。そこにはだた鬱蒼とした草木が茂り、梓尤の強い視線を受けてあたかも怯んだようにざわめくだけ。

十メートルである。梓尤達に言わせてみれば『たったの』だ。目と鼻の先と言っても過言ではない。それに先程結界を打ち破って来た際に、この辺の動物昆虫は全て甲李の使役する毒虫を以て死滅させた筈だ。

「おい、本当か？　私には何も感じないぞ」

「嘘は言わない。――でも今気づかれたみたい。気配が完全に消えた。恐らく何らかの媒体を利用した幻視の可能性が高い。術者がまだ近くにいるはずだから完全に逃げ出される前に探して消してきて。まだ大事になるのは好ましくないし、貴女の方が私より足が速い」

とんとんと勝手に話を進める甲李。その様を梓尤はただ半眼で眺めるしかなかった。

その上パシリ命令だ。気分が悪くならない方がおかしい。それに相手は見た目は子供だ。そんな奴に命令口調で話されるなんてどうも虫が好かない……とこれまで何百回も思ったことをまた胸の内で反芻する。

「……何してるの。早くしないと」

「何度も言われなくても分かってる。じゃあ、巫女の方を頼んだぞ。東の外れにある神社で落ち合えばいいんだな？」

「そう」

甲李が短く返事をするや否や、突然、ドン！　という地響きにも似た低い音が轟き、梓尤を中心に強い旋風が巻き起こった。

土埃や木の葉が天高く渦を巻いて舞いあがる。

と思えば、甲李が一度瞬きをすると、既にそこには梓尤の姿は見えなかった。

「……」

甲李は一寸の間空を仰ぎ、それから霊夢ではなく結界の穴へ向けて歩を進めた。
穴の前で立ち止まると、目を閉じ、何やら呪文のようなものを低い声で一心不乱に唱えだした。
そして数十秒後、ゆっくりと目を開け、最後に、
「――游行（ヨウシィン）」
と締めくくった。
すると、その結界の穴に変化が現れた。
気配。そして、音。
ざっ、ざっ、ざっ、ざっ……と。
一つが二つに、二つが四つに、四つが八つに、八つが――
そう、何か大勢の者が行進しているかのような、足音。
不気味なほどに整列されたそれは、まさに地獄の底から這い出てくるかの如く不気味さを感じざるを得ない。
不安と恐怖と――形容することの出来ない『異』。
そして次第にその音は大きさを増していき――

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1217ba/

東方幻永伝～End of the fragile dream～

2012年1月13日01時47分発行